



自然釉甕
鎌倉時代
高42・8
cm

柳宗悦と古丹波

Soetsu Yanagi and Old Tamba

2019年9月10日(火) - 11月24日(日)

日本民藝館



「最も日本らしき品、渋さの極みを語る品、貧しさの富を示す品」(『丹波の古陶』1956年)、当館創設者・柳宗悦(1889～1961)は晩年、古丹波についてそう評しています。日本六古窯のひとつに数えられ、一部の茶陶はすでに名声を博していた丹波焼ですが、柳の眼差しは、それまで粗雑な品として顧みられていなかった日常の器に向けられたのです。

柳は関東大震災の直後、1924年に京都に移り住みます。この時期、朝市で当時「下手物」と呼ばれていた、日常雑器の蒐集に励みました。丹波焼へ関心が芽生えたのもその頃のことです。日本民藝館の設立を宣言した『日本民藝美術館設立趣意書』(1926年)の発表から間もない1927年1月、丹波布の調査の為に初めて兵庫・篠山を訪れた柳は、道具商の尚古堂で丹波焼を見る機会を得て、後には立杭の窯場へも足を運びます。当初江戸時代以降に発達した流釉や筒描の品に心惹かれていた柳は、『雑器の美』(1927年)の挿絵に、京都で入手した流釉の蠟燭徳利(図8)を取り上げました。各地での蒐集や執筆活動に明け暮れていた1938年、柳は河井寛次郎(1890～1966)や濱田庄司(1894～1978)らと大阪の阪急百貨店での尚古堂主催「丹波古陶の名品会」へ赴き、そこに出品された品々に改めて驚嘆することとなります。その後、中世期の穴窯時代に見られる、薪木の灰が焼物の上に降りかかり自然釉となる灰被に、人の作為の及ばない「他力美」を見いだし「品物に驚くべき美しさを与えている」と称賛の言葉を残しました。灰被との出会いで丹波焼への敬愛の念を強くした柳は、以降も蒐集に邁進していきます。

当館では、民藝運動の初期から、盛んに灰被の品が蒐集された柳の晩年までの、300点を超える丹波焼を所蔵しています。当館の日本陶磁器コレクションの中心を担うこの蒐集は、尚古堂の店主でのちの丹波古陶館初代館長・中西幸一(1896～1969)と通(1932～2003)の親子二代にわたる厚誼がなければ成しえないものでした。柳は「この蒐集の成長は、やがて私自身の心の成長でもあった」と振り返っています。丹波窯の長い歴史の中からは、甕や徳利、皿など日常で用いる為の豊富な器形が生まれました。そして自然釉を始め、登窯(蛇窯)が導入された近世以降の赤土部釉を施したのもや、江戸時代後期に開発された流釉・筒描(いっちゃん)・墨流・線彫そして白掛などの技法により、多様な表情が出現したことも大きな特徴です。

本展では、当館が所蔵する丹波焼コレクションの中から約100点、さらには今年開館50周年を迎えた丹波古陶館の優品約50点を併せ一堂に展覧し、古丹波の魅力に迫ります。

出品協力 丹波古陶館

1. 三筋壺 平安時代末期 高25.5cm 丹波古陶館蔵
2. 白地筒描網目文皿 江戸時代後期 径25.4cm 丹波古陶館蔵
3. 赤土部釉黒流魚文甕 江戸時代中期 高20.4cm
4. 赤土部釉灰被文字入徳利 江戸時代 1657年 高53.0cm

5. 白掛水滴 江戸時代後期 高7.5cm
6. 白地墨流茶碗 江戸時代後期 高8.8cm 丹波古陶館蔵
7. 赤土部灰釉壺 江戸時代中期 高38.8cm
8. 白掛黒流蠟燭徳利 江戸時代末期 高15.7cm

6	5	4	2	1
8	7		3	

※記載のないものは日本民藝館蔵



丹波窯について

いわゆる六古窯の一つである丹波窯。旧丹波国の最南端（現在の兵庫県丹波篠山市今田町周辺）で、開窯期から現在まで約800年間にわたり民陶の伝統を守り続けてきた。

開窯の時期については長い間鎌倉時代初期の12世紀末と考えられてきたが、その後の調査によって、三本峠北窯などの古い窯址の出土品などから、開窯期が平安時代末期にまで遡ることが明らかとなった。また、製作技術の面においても、常滑窯を中心とした東海地方からの影響が認められるところとなった。

一般に「古丹波」と呼ばれているものは、開窯期から江戸末期までに焼かれたもので、これらは生産された窯の形式から、中世期までの「穴窯時代」と近世期以降の「登窯時代」とに大別される。穴窯時代の造形的特徴であるが、古代から鎌倉期にかけては、時代背景を反映した力強い造形美が特徴で、壺や甕の形状から常滑や越前などとの強い共通性が認められる。しかし、南北朝期から室町期に入ると、しだいに壺や甕の口造りなどは丹波独自のものとなり、特に室町時代中期の15世紀頃になると、赤褐色に焼き締められた器肌に緑色や鳶色に発色した自然釉の掛かった、重厚な趣のある壺や甕類が数多く現れてくる。

記念講演会

9月23日（月・祝） 18時～19時半

「古丹波蒐集100年 丹波古陶館50年」

中西薫（丹波古陶館館長）

10月26日（土） 18時～19時半

「丹波焼と私―灰釉スリップウェアへの道」

柴田雅章（作家）

※各料金300円（入館料別、要予約）



丹波古陶館

〒669-2325 兵庫県丹波篠山市河原町185

〔国選定重要伝統的建造物群保存地区〕内

電話 079-5552-2524

開館時間 9時～17時（最終入館16時45分）

月曜休館（月曜が祝日の場合は開館、翌日休館）

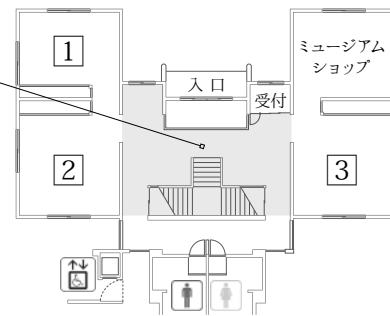
2020年5月2日～7月26日

丹波古陶館開館50周年記念展「丹波―いきる力が美をつくる」を開催予定。当館からも優品の数々が出品されます。

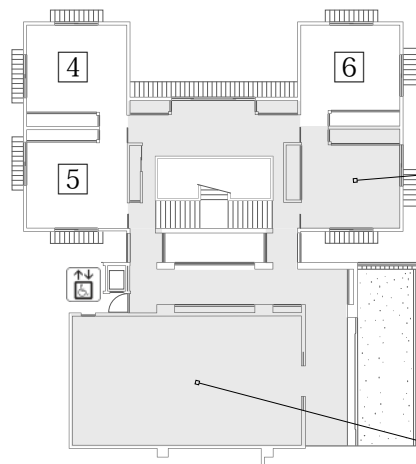
展示会場図

1階 〔玄関広間〕 古丹波の精華

800年以上にわたる長い伝統の中で培われてきた多彩な陶技と、炎が生み出した自然釉（灰被一はいかづき）の美しさが丹波焼の特徴です。この空間では、赤土部・流釉・線彫・白掛などの技法を用いた、江戸時代以降の「登窯時代」を中心とした古丹波の魅力を紹介いたします。



2階



〔2階第3室〕「穴窯時代」の古丹波

丹波窯では平安時代末期から桃山時代頃まで、主に壺や甕などが生産されていました。窯の形状から「穴窯時代」と呼ばれるこの頃の丹波焼は、人の手で施釉されることはなく、無釉の器肌に焼成時の灰が溶けて自然釉となる事で力強く美しい景色を湛えています。

〔大展示室〕 柳宗悦と古丹波

併設展のご案内

1 〔1階第2室〕 木喰仏と絵馬

微笑仏として親しまれる木喰仏は、江戸時代後期に全国を遊行した木喰（明満）上人によって彫られたもので、大正期に柳がその美しさを発見し広く伝えました。本室では木喰仏と共に新受贈の小絵馬など、民衆の信仰と深く関わりをもった造形を中心に展示します。

4 〔2階第2室〕 漆工芸 — 朱漆と絵漆

黒漆を塗った上に朱漆を塗り重ねた根来塗をはじめとする、朱漆で彩られた中世から近世にかけての漆工芸を紹介します。朱漆は、秀衡椀や浄法寺塗などで漆器に文様を描く際にも主色とされ、のびのびとした線描が魅力となっています。

2 〔1階第1室〕 日本と中国の磁器

当館所蔵の日本の磁器には、無垢な美しさが溢れる初期伊万里や簡素な絵付による古九谷様式の色絵類があり、一方中国の磁器としては明時代末期に景德鎮窯で作られた古染付と天啓赤絵などがあります。ここでは両国で生まれた磁器の優品を展覧します。

5 〔2階第1室〕 朝鮮半島の工芸 — 鳥獣表現

朝鮮半島では、富貴や寿福を意味する吉祥文様として、鳥・魚などの身近な動物から、龍などの架空の動物まで、工芸品や絵画のモチーフとして魅力的に表されています。本展示では、朝鮮時代（1392-1910）を中心に鳥獣表現の工芸と絵画を紹介します。

3 〔1階第3室〕 日本の色

人々は古来より、植物などから抽出した色素や、鉱石などから作った顔料を用い糸や布を染め、色彩ゆたかな染織品を生み出してきました。本室では日本の色に着目し、藍や茜、紫など天然染料で染められた染織作品を通して自然の恵みの美しさを紹介いたします。

6 〔2階第4室〕 河井寛次郎と濱田庄司

民芸運動の中心的役割を果たした陶芸家の河井寛次郎と濱田庄司。二人は数多くの工芸品を制作に生かしましたが、古丹波焼もその一つに挙げられます。本展示では流釉や筒描など、丹波焼の主要な技法を用いた二人の作品を中心にご覧いただけます。

□開館時間 10:00-17:00（入館は16:30まで） □休館日 月曜日（ただし祝日の場合は開館し、翌日振替休館） □入館料 一般1,100円 大高生600円 中小生200円
□西館公開日（旧柳宗悦邸） 会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜（開館時間10:00-16:30、入館は16:00まで） □所在地 〒153-0041 東京都目黒区駒場4-3-33
□電話番号 03-3467-4527 □交通 京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分

<http://www.mingeikan.or.jp/>

日本民藝館



次回展・2019年12月14日(土)～12月25日(水) 2019年度 日本民藝館展 — 新作工芸公募展—
2020年1月12日(日)～3月22日(日) 祈りの造形 沖縄の厨子甕を中心に